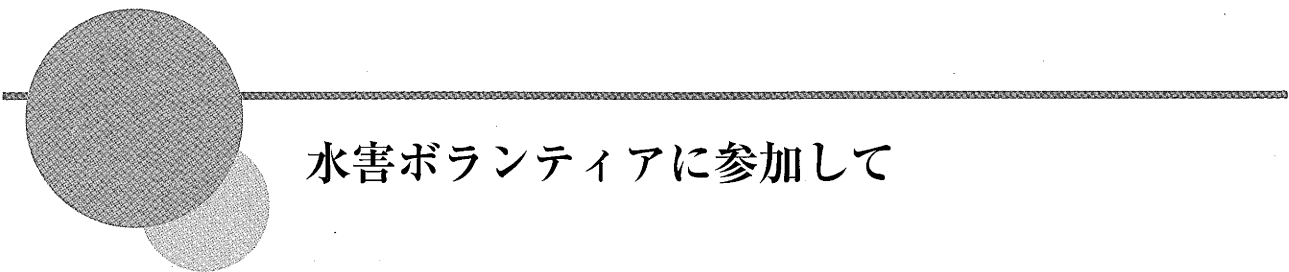


と思う。そのような意味で、どんな状況の人にも参加しやすいシステムを作ることが、非常に重要であるということを考えさせられた。

今回のような災害時のボランティアでは、様々な面から考えても社会人や高校生以下の学生よりも大学生の方が広範囲に活動できることは確実である

し、積極的に参加できる状況があれば、どれだけ被災地域の方々が助かるかという事を考慮すると、是非大学側にもより多くの学生がボランティアに参加できる状況を作るための対策をとって欲しいと思っている。



水害ボランティアに参加して

農業生産科学科3年 滝澤泰暁

真夏の炎天下でのU字溝のどぶさらいがボランティアの仕事であった。はっきりいってとても地味で単調な仕事である。はじめて1時間もしないうちに流れる汗と反比例してやる気と体力が無くなっていった。「早く終わってくれ」、何度この言葉が頭の中にこだましたことか。そして、ひたすらきつい肉体労働は人から感情を奪うもののような気がした。作業はひたすらきつかった。

ただ、まったくの無駄であったのかと思うとそうとも思えない。仕事の合間に飲んだお茶は格別とうまかったし、仕事が終わった後には確かな達成感があった。アパートに帰って入った風呂もその日の睡眠もいつになく心地よかった。また、「小国」という普段自分では進んでいかないような場所に行き、きれいな景色を堪能し、プチ旅行気分を味わえたのもとてもよかった。正直この活動に参加して得たものは「疲労と休息の喜びそして自己満足」であったと思う。

そして、あくまでも傍観者になっていたが、座談会ではほかの人の意見が聞けたこともよかった。「ボランティアの押し売り」、「ボランティアに対する報酬」、「それぞれが参加した理由」、賛同できるものそうでないもの問わず本当に様々な意見が出ていて、人それぞれ得たものの違いや意見の違いを聞

けておもしろかった。

今思っても、なんでボランティアに参加したのか明確な理由はない。しいて言うなら「ただなんとなく時間があったから」「現場の状況を見てみたいから」などせいぜいこんな理由だったと思う。断じて世間で言う「ボランティア精神」なんてものは無かったし、座談会での「ボランティアとは何か」という問いかけにも正直答えに詰まって、自分の意見というよりは一般論のようなことを話してしまった気がする。

こんなことを言うと積極的にボランティア活動に取り組んでいる人に対して失礼に思われるかもしれないが、自分はボランティア活動の意義には参加した後でもやっぱり興味はない。自分が責任感のない人間であることがおおきいが、ただ自分が楽しそうだと思って参加して、単純に楽しい思い出になっただけで十分だと思っているし、あくまで自己満足で終わってもいいと思う。当然ボランティア活動を計画する中心となる人は自己満足では終わらせてはいけないと思うが、その活動に参加する人は、無理に活動理念のようなものにとらわれずあくまで個人的な理由で参加してもいいと思う。そして、むしろその方が参加する側にとっても気軽に参加しやすいような気がする。